

《第十三章・行（作用）を考察する。》

第二項 [単なる事物の本性が欠如すると示す] に二項目がある。[事物が本性として有ることを否定する]、[本性が有ることの理由を否定する] である。

第一項 [事物が本性として有ることを否定する] に三項目がある。[章の著述を説く]、[了義の教証と合わせる]、[意味を要約して章の名を示す] である。

第一項 [章の著述を説く] に三項目がある。[他派に公認される経証によって、本性が無いことを説く]、[そのような解説は不合理であるという反論を斥ける]、[その経証の意味を他の様相として説くことを否定する] である。

第一項 [他派に公認される経証によって、本性が無いことを説く]

そのように、説かれたばかりの論法によって尽く分析したならば、諸事物は我等の四つより起こることは無く、本性として成立したものとして生じさせる他の様相も無い。しかし、無知の眼障によって知恵の目が衰えさせられた者達には自性として生じるとも映る故に、幻の馬や象が幻であると知らぬものを欺くが如く、幼子達を欺く。

それ故に、仏陀世尊は

「法（現象）であり欺くものは、偽りである。」

と、欺くものに偽りが行き渡る（欺くものは全て偽りである）と説かれ、

「一切の行（作用）も欺瞞の主体である。」

と説かれた。然れば、それら一切の行（作用）は偽りである。

経典より、

「比丘達よ。欺く主体であるそれらの有為は偽りであるが、涅槃である欺かぬ主体であるものは、聖なる真実である。」

や、その如く、

「その有為は、欺く法（現象）でもあり、それは全く壊れる法（現象）でもある。」

とも説かれた。

そこで、欺く法（現象）とは、誑かし誤って映る、旋回する火の如くである。聖なる意味（勝義）の真実とは、欺くのではなく、涅槃の如くである。それ故に、自性として無くとも有ると映って欺くと、正理によって成立し、経証よりも行（作用）は欺きであると説かれたことより、諸事物は本性が無いと成立した。（何故ならば）般若経より

「一切法（現象）は空であり、本性が無いあり様によってである。」

と現れる故である。

ここで、経部より涅槃は真実であると説かれたことは、諸行（作用）は不真実であると示すけれど、「欺く主体である」と説かれた要旨によって、欺かぬことを「聖なる真実」という。しかし、自らの本質の力によって成立した、真実としての成立（実在）ではない。

第二項 [そのような解説は不合理であるという反論を斥ける]

「もしそのように、欺く主体そのものであることによって、一切の行（作用）が偽りであると示したならば、意味を為すことのできる事物は何も無いので、一切の事物を抹消するする悪見となるだろう。」という。先に引用したその経典は声聞部に公認される経典であるが、二派の実在論部は、その経典の意味をそのように主張しないので、このように反論する。これは、偽りである一切は「兎の頭に角がある。」というように捉えて、『そう見るのであれば、一切の因果が無くなるだろう。』と思ったのであり、自性として成立していないながらそう映ることを偽りであると置き、幻に似た、それら映る意味によっても行為を為すことができることを知らずに言うものである。

今更にも君を欺くものである「欺く主体である諸行（作用）は自性として有る」とは、君に真実である。（何故ならば）君に似た者が、これによってそのように欺かれていなければ、これが幼子を欺くとする意味が無い故である。

もし、「欺く法（現象）であるものは、偽りである。」と説かれた時、それについて何を欺こうか。何が事物を無いと捉える抹消となろうか。事物が自らの自性として何か有るならば、諸事物は偽りであると示せば、それを抹消するので虚無のようになるが、事物は本性として有ることが僅かにも無い時、それにおいて何を欺こうか。存在する何も無いと言わないので、その論難は正しくない。

もし、「君は、その経証によって真実を否定した偽りを示したと主張するけれど、意味を為すことのできる事物が無いと示さなければ、この経証が何を示すのか？」といえば。

世尊がそこで「行（作用）は偽りである」と斯くも説かれたことによっては、事物は無いと示さないが、本性として生じていない空性を完全に示したのである。

『無暖池龍王請問経』より、

「縁より生じたものは生じていない。それに生じる本性は有るのではない。

縁に頼るものは空であると説かれた。空性を知るものは不放逸である。」

と、縁に頼ることを、本性として生じていない意味と説かれたように、行（作用）を偽りと説かれたことによっても、本性として生じていないことを示すが、生を否定した無事物を示すのではない。

そのようであれば、本性として生じていないながらそう映ることが、「欺く」や

「偽り」と説かれた経証の意味であると説明された。

第三項 [その経証の意味を他の様相として説くことを否定する] に二項目がある。[経証の意味を他に説明する方法を示す]、[そのように説く理由を否定する] である。

第一項 [経証の意味を他に説明する方法を示す]

声聞部が、先に引用したその経典で壊れる主体であると説かれたことに依拠して、一切の事物は自らが成立した時点より第二時点に居らぬにも拘らず居ると映ることを、「欺く」や「偽り」の意味であると主張する。そのようにすれば、本性として生じていないことは経証の意味ではない。しかし本性に留まらないことが、「本性が無い」、あるいは「偽り」、または「真実が無い」と説かれた意味であると言う。

その理由も二つあり、第一は、諸事物に自らの本質として成立した自性が無ければ、これらが他に変化することが現れるとはならないけれど、現れる故に、自らの本質として成立していないことが経典の意味であるとは適さない。しかし、本質は他へ変化するので本性に留まらないことが、経典の意味である。

第二の理由は、諸事物は、本質として成立した無自性が、無い。何故ならば主体である諸事物の法（性質）である空性を主張しなければならない故である。存在しない石女の子に、その蒙古斑（が有ること）は不合理であるので、主体無くしてそれに依拠した性質も不合理である故に、諸事物は本性として有る。「もし事物に自らの本質として成立した自性が無ければ、他に変化するこれは、如何なる法（現象）の本質であろうか。」とのたまう。

これらの対論者は論理の構成について通じているので、自らが承認した幾つかの経証より、本性が無いと説かれた経証の意味を説明するならば、「自らの本質に留まらない無常をお考えになられた」と言うのである。しかし本性の有無や、真実として成立した・成立していないという意味を、恒常として有るか、無いか当ててのでは全くないので、雪山の中部<sup>1</sup>の妄言を吐く幾らかの対論者がそのように言うこととは、大きく違う。

瑜伽行者（唯識派）が、事物は真実であると言う論書（『根本中論』）の講釈を為した<sup>2</sup>ことは、根本論書著者の後で起こった。従って、ここでも自部（仏教徒）を対論者とする場合に、二実在論派<sup>3</sup>を対論者となさっているが、それらに経証の批判を

<sup>1</sup> 雪山の中部：チベット。

<sup>2</sup> 瑜伽行者…為した：唯識派は彼らの主張する三性（遍計所執性・依他起性・円成実性）のうち、依他起性と円成実性は実在すると主張する。事物は依他起性に含まれるので、実在することになる。唯識派が『根本中論』を解説した時、「事物」を彼らの主張に沿って解説した。

<sup>3</sup> 二実在論派：毘婆沙部と経量部。

示すとしても、まさしく小乗の蔵より現れるものによってなされた。

そう見るとしても、これらの主張を否定したならば、瑜伽行者（唯識派）の事物は真実であるという主張も否定したことになるので、否定する正理は、共通のもののみである。

第二項 [そのように説く理由を否定する] に二項目がある。[他に変化するものが本性として有る理由を否定する]、[空性が本性として有る理由を否定する] である。

第一項 [他に変化するものが本性として有る理由を否定する] に二項目がある。[本性と他に変化することの二つは矛盾することによって否定する]、[他に変化することが本性として有ることはあり得ないことによって否定する] である。

第一項 [本性と他に変化することの二つは矛盾することによって否定する]、  
「法（現象）であり、ある事物について間違いのないものが、その本性である。」と述べられる。（何故ならば）他によって否定される対象として無い故である。それも、火において間違いのない火の熱のようなものでなければならない。  
もし、諸事物が、自性一本性として有るならば、それは、その本性であると主張するそれより他に変化すると、如何様に適おうか。それは適わない。「他に変化することも見られる故に、本性として有るのではない。」と反転させた論式を放った。<sup>4</sup>それは、世俗としての他に変化するものである。

第二項 [他に変化することが本性として有ることはあり得ないことによって否定する]

先ず、以前の時点に留まる事物そのものにおいては、他に変化することは無い。何故ならば、このように他に変化することは、老の異音同義であるならば、まさしく壮齢の時期に留まる若者においては老いぬー老いが有るのではない故である。（何故ならば）その時点で壮齢より他に変化することは不合理である故である。

もし『若者に老いは主張しないが、〈老いた〉もの自体が老いる。』と思えば、他の〈老いた〉もの自体においても、老いは有るのではない。何故ならば、〈老いた〉ものにも、老いる変化は必要ない故である。

これについて『顕句論』より、老若の二つの時点は反することと、『ブッダパー

<sup>4</sup> 「他に…放った。：反転させる前の背理の論式は、「諸事物は、他に変化することは見られないのか？本性として有る故に。」この主張命題の述語と理由を反転させて「諸事物は、本性として有るのではない。（何故ならば）他に変化することが見られる故に。」となる。

リタ』より、老若の二つの時点が、一人のプトガラ<sup>5</sup>に同一時に無い理由によって、若者が老いたとなることを否定した正理とは、祭祀の滅しつつある若い時点と、生じつつある老いた時点の二つは同時であるけれども、二つの時点が同一時に無いことは自派も世俗として主張しなければならない。

然れば、先に生を否定する場合に説かれた如く、他に変化することが自性として有るならば、二つの時点が同一時に留まる過失が有ることによって、否定するのである。

もし、『老いたとなった』他は老いるとならないけれど、他である若者そのものが『老いた』となる、他に変化することは、自性として有る。」と主張するならば、そのようであれば、乳そのものが自らの時点を手放さずにヨーグルトとなるだろう。

「何？乳の時点を手放してヨーグルトの時点に変化する故に、乳そのものがヨーグルトにはならない。」といえ、もし、互いに反するので、「乳そのものがヨーグルトに変化する。」と主張しないならば、乳より別物の何がヨーグルトという事物になろうか—なることはない。ヨーグルトと水のように、他の何もヨーグルトにならない故である。

「以前の一法（現象）が後に変化する。」という言い方は、老若や乳とヨーグルトのようなものに有るが、火と薪のような因果においては、「薪は火となる。」という言い方を、世間ではしない。

そのように、他に変化することが自性として有ることはあり得ない故に、無常が自性として有ることが「行（作用）は欺き、偽りである」と説かれた意味ではなく、諸事物は自らの自性として生じていないことが、経証の意味である。

斯くも、『宝生経』より、「生じること無く起ること無い法（現象）を、」より「解脱されて多くの有情を解脱せしめた。」という最後に、

「無我であると全ての法（現象）を示され、有情の執より世間を尽く解放された。御自身が行くことより解放され、行くことより解放されたので、それ故に、彼岸へ去られても超過することも無い。偉大なる仙人は有（輪廻）の彼方へ行かれた。彼方へ去られた何もものも見出すとならない。彼方は有るのではなく、此方は無い。『彼方へ去られた。』とも言葉で説かれる。

貴兄が言葉として言うそれも無い。言われたその言葉も有るのではない。何かと言うそれも見付からない。何かを知るそれ（主体）も有るのではない。誤った考えに執着する影響で、ここにこの全ての衆生は酷く流浪する。

ある者が寂静の法を知る。彼は自然の如来を見る。最高の法である諸々の寂静も良く知り、喜びを見出し、有情を満足させる。煩惱に勝ち、その者は勝者となる。自身が勝者となり、留まることは無い。それ故に、勝者の菩提を良く御存知である仏陀より、衆生は知ることをする。」

<sup>5</sup> プトガラ：心身の集積に名付けられた「者」。

と説かれ、他に變化するものが無いことと、自性が見付からないことと、それを了解していない過患と、了解する効能を当てはめる。

第二項 [空性が本性として有る理由を否定する] に二項目がある。[本義]、[それについて、経証との矛盾を斥ける] である。

### 第一項 [本義]

「前述での、事物が自性として無いことは、有るのではない。諸事物が空性であるとは主張する。それ故に、空性の拠所となった事物は本性として有る。」と言ったことは正理ではない。もし、自らの自性として成立した空性が僅かに有るならば、自性として存在する不空である、その拠所が僅かに有るとなろうが、ここで空性と無我は、一切法（現象）の総体的性相（定義）であると承認しているので、我が欠如していないものは僅かにも有るのでなければ、空性が自性として有ると、何処でなろうか。そうはならない。対治<sup>6</sup>との相互関係と離れる故に、虚空の花の如くである。

「一切法（現象）は無我である。」という経証を、二実在論部も承認するが、「無我」において無いものである「我」とは、二阿闍梨ともが自らの自性として成立したと承認されるので、『顕句論』より前述の様に説かれたことも合理である。

『ブッダパーリタ』より、

「分析したならば空でないものは僅かにも無いので、空が有ると何処でなろうか。」

と説かれ、一切法（現象）が無我である意味もまさしくそれであるので、意味は類似する。空性である僅かなものが真実として成立したと主張すれば、その拠所である真実として成立した主体を、僅かながらも疑うことなく主張しなければならない。

（何故ならば）拠所である主体無くして依拠した法（性質）が留まることはあり得ない故と、真実として成立した拠所が偽りによって為すことは矛盾する故である。

然れば、それについては中観派と実在論派の双方に共通であるが、そう見るとしても実在論者は主体と空性の双方とも真実（実在）であると主張するが、中観派によっては、主体は真実（実在）でないので、空性も真実として成立していないと承認する。

瑜伽行派（唯識派）の賢者達も、円成実性<sup>7</sup>が真実として成立する為に、その拠所である依他起性<sup>8</sup>が真実として成立しなければならないと見て、依他起性を真実であ

<sup>6</sup> 対治：ここでの意味は、相反するもの。「空」の対治は「空でないもの」である。

<sup>7</sup> 円成実性：唯識派が説く三性の一。唯識派の空性。

<sup>8</sup> 依他起性：唯識派が説く三性の一。唯識派の説く空性の拠所となる事物。

三性のもう一つは遍計所執性<sup>へんげしよしゅうしやうしやう</sup>といい、空性以外の恒常と無。

ると論証する。(何故ならば)それが真実として成立したならば、その空性が真実であることは努力無くして成立する故と、それが真実として成立していなければ、まさしくその理由によってその法性も無真実(非実在)となる故である。

然れば、それらより反して言及することは、自部(仏教学派)上下の何もの説でもないので、捨て去られるのみである。

『入菩薩行論』より、

『『何かが無い。』と、考察対象の事物が認識されない時、拠所を離れた無事物が、心の知覚面に如何様に留まろうか。』

と説かれたことによっても、否定対象が否定される拠所であると示すのではないが、「実在の事物が成立していないならば、実在の『無事物の空性』の拠所は無い。」という意味である。

第二項 [それについて、経証との矛盾を斥ける] に二項目がある。[経典の意味を説く]、[それを説かれた根拠を示す] である。

第一項 [経典の意味を説く]

もし「世尊が弟子達を解放する為に、空と無相と無願の三解脱門<sup>9</sup>を説かれたことは、非仏教徒と共通ではないので、如来の善説のみに認められるけれど、君は今、善説を語る詐術によってその空性を捨て去り始めた。従って、善趣と浄脱の道のりを断つ君と論争しても構わない。」といえば。

嗚呼、何ということだ！非常な誤りとなったことによって、解脱の都へと行く真っ直ぐな道を捨てて、事物と無事物を真実であると執する蛇が巻き付いた輪廻の荒野へ行く道を、解脱へ赴くと思ひ込む君は、聖者によって叱責される者でありながら聖者を咎める者である。おおい！偉大なる医師の王である勝者方が、空性とは、全ての見解一諦執(実体視)より出離する一抜き出すものであると説かれた故に、実在視の捉える対象一切はただ退くだけである。「ただ退くだけ」が、自らの自性として有るのでもない。然れば、その空性を自性として有ると見解する者達は、成し得ることが無い一治しようがないと説かれた。

これは、「君に売る商品は何も無い。」と言ったけれど、「おい！俺に、何も無いというその商品をくれ！」と言われれば、その相手に、自分に商品が無いと認識させる方法が無いことに似ていると、二阿闍梨ともが説かれた。相手が、『こいつには与える商品が無いのだ。』と思う心を生じさせる為にその言葉を言ったことによって、その心が生じさせられてはいけないのではないが、『〈商品が無い〉が商品である。』という心は起こされてはいけない。

その如く、「諸事物は自性として有るのではない。」と示すならば、『これらは実

<sup>9</sup> 空…解脱門：解脱を得る為の三種の禪定。瞑想の対象を空・無相・無願の三種に分ける。

在（真実）が欠如する。』と認識してはいけないのではなく、『事物は実在（真実）が欠如するこれが、真実である。』と認識してはいけないのである。

然れば、『諸法（現象）は空である。』と捉えたならば、再びどうしようもないことをこの経論が示したと主張することは、非常に非考察的言説である。

二阿闍梨ともが、「空性であると見る（見解）」という意味を、「空性を事物であると執すること」であると説かれたことは、空性を真実であると捉えたか、空性は自性として有ると捉えることである。ただ『本性は無い。』と認識するだけであるとは何事か。

『四百論註』よりも、

「もし、『空性』という自らの本質として成立した何かが有るならば、諸事物は本性と共に有るとなるが、有るのではない。」

と説かれた。

「空でないものが無ければ、空とは、何かよりまさしく起こるとなる。如何様であれば一方が、無くして対治が起こるとなろうか。」<sup>10</sup>

と説かれたが、その解説に本偈も引用された。

前述で「声聞部が空性は真実として有ると承認したこと」を、前の偈と本偈の二偈によって否定することによって、単に無我が有ることのみを否定するのでは全くない。そのように経論の意味を誤って捉えたならば、「勝義諦はあり得ない」という抹消と、「あり得るとしても、それによって確認した確信を保持したならば様相を捉える執となる」と捉えて、清浄な意味を正しく確認する見解を保持することに対する、大きな障害を為すのである。

## 第二項 [それを説かれた根拠を示す]

「その原典によって説かれた。」という経典よりの根拠は、『宝積経』の「迦葉請問」より、

「空性であるものが諸法（現象）を空虚にはせず、諸法（現象）そのものが空であり、無相であるものが諸法（現象）は様相が無いとはせず、諸法（現象）そのものが無相であり、無願であるものが諸法（現象）を無願とはせず、諸法（現象）そのものが無願であると、そのように妙観（それぞれに考察）することは、迦葉よ。『諸法（現象）を正しく妙観する中道』という。

迦葉よ。空性であると認識することで空性を考える者達を、私は『この善説より衰え、酷く衰える』と説いた。」

<sup>10</sup> 「空でない…なろうか。」：『四百論』第 16 章 7 偈。

「不空が無ければ、空とは、何かよりまさしく起こるとなる。如何様であれば一方が、無くして対治が起こるとなろうか。（パツァブ訳）」

と説かれた。

空性等によって、諸法（現象）そのものを空であるとせず、諸法（現象）は空である等と説かれたことは、法（現象）それ自体実在が欠如するのではなく他の何かが真実であるので、それが空であると捉えられていない意味である。

「空性を考えることは、酷く衰える」と説かれた思考法とは、「空性であると認識することで」と説かれたので、真実であると認識することとするが、『空性である。』と思う考えにとしない。そうでなければ、その直後に空性等の三についての妙観は、中道であると説かれたことと矛盾することになるだろう。

空性であるとする見解は治しようがない例と、意味を合わせる方法も無い。本経より、

『迦葉よ、これを見よ。例えば、病人が一人いるが、医師がその者に薬を投与したことで、その薬によって彼の全ての病が掻き乱され、薬が胃に入ること自体が起こらなければ、迦葉よ、これをどう思う？その人はその病から解放されるだろうか？』

（迦葉が）申し上げた。『世尊よ。そうはならないでしょう。その薬によって全ての病が掻き乱され、薬が胃に届くこと自体が起こっていないければ、その人の疾病は非常に重篤となるでしょう。』

世尊がお言葉を賜れた。『迦葉よ。その如く、見解となった一切のものより抜け出すものが空性であるけれど、迦葉よ。〈空性のみであると見解する者は、治しようがない。〉と、私は説いた。』

と説かれた。

薬が以前完治していないものを浄化して、薬自体は吸収されないことで病を生じさせることを例とされたこれは、自部（仏教徒）の实在論者二部が無我を真実（实在）であると主張することと、以前の雪国者（チベット人）の或る者が、諸事物は究極を分析する正理による分析に耐え得るものとして有ることを否定して、そのように否定した空を真実（实在）であると主張する者達に当てはめられる。（何故ならば）否定対象を否定した空（欠如）を了解することによって、顕在化した多くの煩悩の病も退くが、空は真実であると捉えたことによっても、煩悩の病を生じさせる故である。

それらより他に、空と不空の二つのあり様を構成することについては、空のあり様は量（正しい認識主体）が否定したのではなく抹消である故に、前述の喩例の意味は無く、空でないあり様として捉えるので、ただ煩悩の病を生じさせるのみである。

## 第二項 [了義の教証と合わせる]

そのように、一切の行（作用）は自性として成立したことは無いながら、そのよ

うに現れることと、自性として有るものに他に変化することは適わぬことと、真実（実在）が欠如する空性は実在が無いと示されたことが、深甚な教証によっても成立することは、既に前述で折々に参照したので、それに類推して知りたまえ。

第三項 [意味を要約して章の名を示す]

偽りの騙し方は、自らの性相（定義）として成立していないながら、そう現れることであり、まさしくそれにおいて一切の行為対象と行為が合理である。従って、偽りの意味を、一切の行為対象と行為するものの事物が欠如することであると捉えるものではない。他に変化することや無常も、それに類似する。

偽りにおいて実在を否定した空は、真実（実在）として成立していなくとも、成立していないのではないので、解脱を追求する者達がそれを対象として修したことによって、障碍を滅尽させる修行道の瞑想対象として、非常に合理である諸々のあり様を確信したまえ。

「行（作用）を考察する」という八偈の我性、第十三章の解説である。